
Scientific Approaches to Language No.10

March 2011

はしがき

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要Scientific Approaches to Language (SAL) 第10号をお届けします。SALは、CLS発足の初年度（2001年度）に第1号を刊行しました。それから、10年、無事に第10号を刊行できること、大変嬉しく思います。

CLSの10周年という記念の年であったことから、2010年7月には、それを記念し、井上和子先生（CLS顧問（本学・名誉教授）であり、CLS発足の基盤となった1996年～2001年の5年間にわたるCOEプロジェクト『先端的言語理論の構築とその多角的実証－ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る－』を率いられました）と久野暉先生（ハーバード大学・名誉教授）という、日本における生成文法研究の発展に多大に貢献をなさったお二人をお招きして、『70年代「日本語の生成文法研究」再認識』と題した2日間の「講演会・ワークショップ」を開催しました。CLSの10周年という位置づけから、本学・本大学院・CLSと関わる教員・研究者が中心となりましたが、国内外からも発表者を迎え、平日だったにもかかわらず、大勢の参加者を得た、盛大な研究会となりました。CLSは、COE時代を含めれば過去15年間、裾野の広い長期的視点に立った言語研究の基盤を提供することを活動の一つの目的としてきましたが、それが、具体的な形として確認できる機会となりました。

そのワークショップでの講演・発表の内容については、巻末の「活動報告」（119～145頁）に要旨を掲載していますので、ご参照下さい。また、10周年記念の活動の一環として、そこでの発表論文を中心に、論文集（『70年代生成文法再認識－日本語研究の地平－』（仮題）長谷川信子（編）、開拓社、2011年秋）の刊行を予定しています。

CLSは、上記のCOEプロジェクトを基盤に設置されたことから「言語学」をその研究の軸にしていますが、CLS発足と同時に、「言語学」の応用分野としての「言語教育学」に関わる研究も遂行してきました。本号に掲載されている論文は、その2分野からのもので、それらは、CLSで支援している（してきた）科学研究費助成金などで遂行された研究、CLS独自の研究（通称「井上ゼミ」として、顧問の井上 和子先生を中心にした研究活動など）、CLSとも関わる児童英語教育研究センター（C-TEC）での研究、CLS 非常勤研究員による研究の成果です。CLSでの研究の裾野の広さと研究の質の高さと充実を感じていただけたと思います。

CLSの発足直後からCLSを事務補佐員として献身的に働いて下さった椎名千香子さんが、2010年3月末に退職することとなりました。この10年の研究活動が順調な進展と多くの成果は彼女に負うところが大きいので、大変残念です。今後のご健闘をお祈りします。そして、椎名さんの後任として3月から角田雪絵さんが事務補佐員を務めて下さっています。

SALの編集作業は、研究員の神谷昇さんに一手に引き受けていただいています。丁寧で迅速な作業、感謝いたします。本号の編集作業の最終段階で、東日本大震災、そして原発事故という未曾有の大災害が起こりました。幸い、神田外語大学の被害は限定的で、CLSの日々の研究活動には大きな支障はありませんでした。こうした活動を滞りなく継続できることに感謝すると共に、一日も早く被災地が復興へと向かうことができること、心より祈念しております。

2011年3月
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

言語教育学編

堀場 裕紀江・西菜 穂子・松本 順子・鈴木 秀明・李 榮・山方 純子
日本語学習者の語彙知識の多面性－中国語母語話者の場合－

第二言語 (L2) 学習者の語彙知識の多面性について調べるために、中国在住の中国語を母語とする大学生 (62名) を対象に語義テストと連想語テストを行い、その応答データを日本語母語話者60名のデータも参考にして分析した。その結果、学習者はどちらのテスト正答率にも語の頻度や言語習熟度による影響があり、語の基本的な意味に関する知識は語と語の意味の関係に関する知識に比べて早く習得されることが明らかにされた。また、語義テストでは名詞が動詞や形容詞・副詞に比べて正答率が高く、連想語テストでは共起語の関係に比べて上位語・下位語の関係の方が正答率が高かったことから、学習者の語彙知識には品詞の種類や連想の種類による影響があることが分かった。さらに、L2学習者の語彙知識にみられる母語話者の語彙知識との量的および質的相違には、母語や学習経験の特徴が影響していると考えられる。

西菜 穂子

タスクとテキストタイプがL2作文の言語分析に与える効果

本研究は制限時間のあるL2日本語作文に対し、タスク条件 (統制群、語彙辞書使用群、モデル文使用群) とテキストタイプ (意見文、記述説明文) が言語分析 (流暢さ・複雑さ・正確さ) に与える効果を検証した。L2日本語学習者19名分38作文を分析した結果、語彙辞書群はモデル文群と比較して、流暢さ (異なり語の数、 $p<.05$) に統計的に有意な負の効果を示した。また記述的には、語彙辞書群は正確さに負の傾向、モデル文群は複雑さ (意見文のみ) に正の傾向を示した。テキストタイプ別の比較では、記述説明文は流暢さ、正確さに効果を見せる一方で、意見文は複雑さへの効果を見せ、複雑さと正確さの間にtrade-off効果が見られた。

ERI OSADA (長田 恵理)

Teachers' Use of L1 in Elementary School EFL Classes

Foreign language activities will be implemented for all the grade 5 and 6 pupils in elementary schools throughout Japan in 2011. However, more than three fourths of the elementary school teachers were not confident in teaching English (Benesse Kyoiku Kenkyu Kaihatsu Center, 2007) and an effective teacher training is indispensable. This study focused on teachers' use of their pupils' L1, which is Japanese, in the elementary school EFL classes. A questionnaire was administered both to teachers and pupils in order to examine their perceptions of L1/TL use, whereas classroom observation data were analyzed to explore how the L1 was used. The results show that the homeroom teachers expected themselves and were expected by their pupils to speak more English and that it might be helpful for the homeroom teachers to learn some specific expressions so that they can use more English in the classrooms.